



文化財愛護シンボルマーク

大分県文化財調査報告 第十五輯

—昭和四十一年度新産都区域内緊急発掘調査—

中ノ原
馬場
古墳緊急発掘調査

—付周辺調査—

大分県教育委員会

凡 例

一、本調査報告書は、大分地区新産業都市造成による昭和四十一年度緊急発掘調査報告書である。

一、本調査は、日程の都合で調査団を、大分郡野津原町黒山遺跡班、北海郡佐賀関町馬場古墳、中ノ原古墳班の二班に編成し、実施されたものである。

一、本調査報告書は、紙数の都合で、前記古墳関係のみを収録した。

なお、黒山遺跡については、昭和四十二年度に実施した杵築市稲荷山遺跡発掘調査報告と合せて、近く公刊する予定である。

一、本報告書の編集は、調査団長である別府大学教授賀川光夫があたり、報告執筆は左記のものが執筆を行なった。

別府大学教授（大分県文化財専門委員）

賀 川 光 夫

長崎大学助教授

内 藤 芳 篤

九州大学助手

小 田 富士雄

杵築高校教諭（大分県文化財専門委員）

入 江 英 親

別府大学嘱託

岩 尾 松 美

序 文

新産業都市区域内所在遺跡の緊急発掘調査も二年目を迎え、多くの成果をあげ得ましたが、学術調査より開発が先行し、多くの遺跡が破壊されている事実は関係者として遺憾にたえないところであります。

今回緊急発掘調査を実施した遺跡は、主に農業構造改善事業と関連するものでありましたが、土地所有者の生活権を考慮し、記録保存という消極的な手段しか講じ得なかったことは、深く反省すべきであると考えられます。

関係者としては、より多くの遺跡を破壊から守るため緊急調査を実施していますが、これら学術調査はあくまで消極的手段にかさず、県民各位がみずから遺跡保護を自覚するよう、文化財保護思想の啓蒙徹底をはかることが、課せられた責務であることをご痛感している次第であります。

発掘調査に当たっては、国庫補助金の交付を受け、別府大学教授賀川光夫氏をはじめとする調査員の各位、また別府大学史学科学生諸君の格別なご協力により無事終了いたしました。

ここに、ご協力いただきました各位のご苦勞と、佐賀県庁当局ならびに関係者に深く感謝いたしますとともに、今後の文化財保護行政に格別のご協力を賜わりますようお願いし、序文といたします。

昭和四十三年三月

大分県教育委員会教育長

平 田 肇

第一版圖

一 九	一 八	一 七	一 六	一 五	一 四	一 三	一 二	一 一	一 〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
〃	〃	〃	佐賀関周辺調査	〃	猫塚古墳人骨	〃	〃	〃	猫塚古墳	〃	〃	〃	築山古墳	〃	〃	〃	〃	中ノ原古墳
(4)	(3)	(2)	(1)	(2)	(1)	(4)	(3)	(2)	(1)	(4)	(3)	(2)	(1)	(5)	(4)	(3)	(2)	(1)
19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1



古墳遠望（南西より）



古墳近景（東南より）



石室入口の閉塞状況（写真より）



閉塞除去後の石室



石室西壁の石材構架状況



石室東壁の石材構架状況



石室及び墓道断面の略図



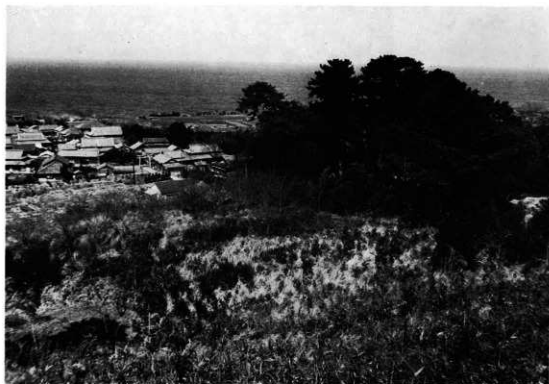
石室東壁外側の基部と封土の接合状況の略図



石室奥壁外側の解剖



葬室部の土器出土状況



古墳全景（南より）



後円部石棺をまつる祠堂（右・北棺、左・南棺）

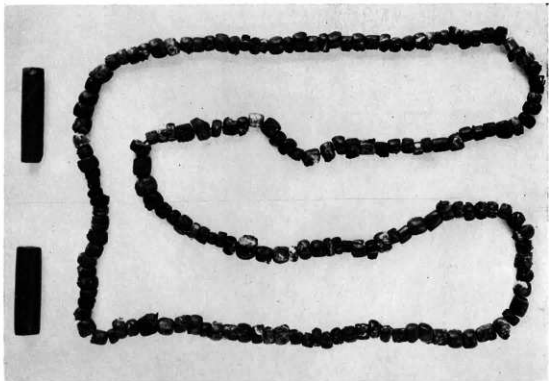


南棺の現状

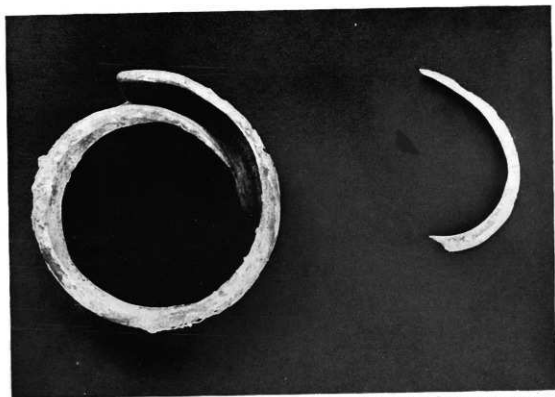




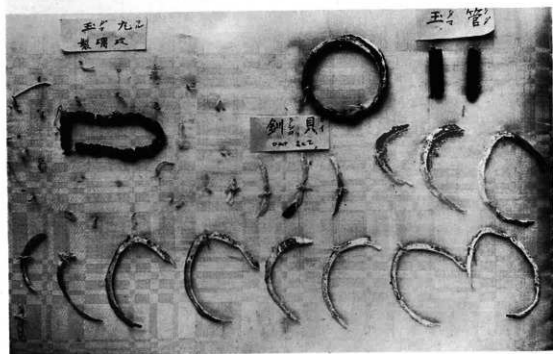
鏡文鏡 (実大)



管玉と小玉



イモガイ (左) と二枚貝 (右) の貝類



装身具 保存状況



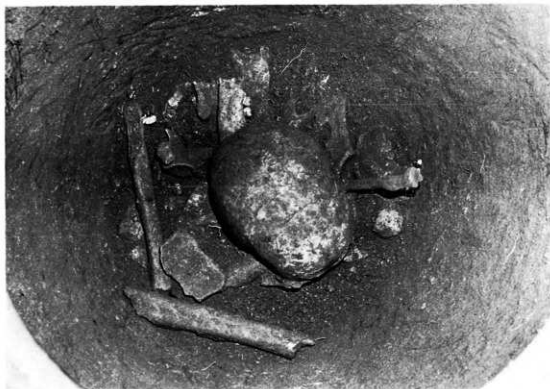
猫塚古墳遠望（東南より）



再埋葬地の現状（祠堂下の板石は石棺材）



再埋葬地の祠堂下にあられた甕



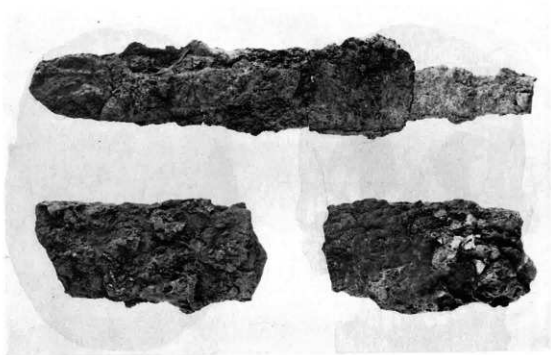
甕の底部にあられた人骨の一部



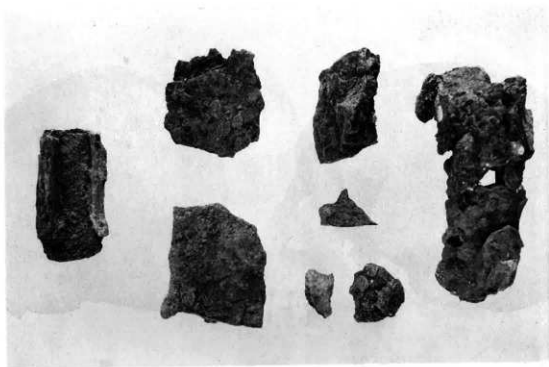
漢式鏡片 (2倍大)



上製玉 (1.5倍大)



鉄剣二種と刀子（上の鉄剣に附着）



鉄剣破片と矛袋部（右端）



圖版第一五 猫塚古墳人骨

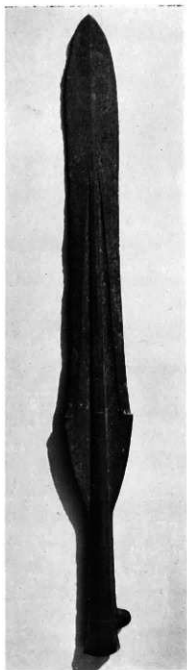




幸ノ浦・三柱神社



神崎・元金毘羅の石棺石材



幸ノ浦・中広銅矛（全形と部分）



大志生木・十谷：應安六年銘 宝篋印塔（全形と部分）



一尺屋・上浦：陶製摺鉢（外形と俯瞰）

目 次

調査団の構成	1
調査経過	3
一 黒山遺跡調査班	3
二 古墳調査班	3
北海道佐賀岡町の古墳調査報告	6
一 馬場古墳	6
二 中ノ原古墳	8
三 築山古墳	15
四 猫塚古墳	22
五 結語	28
猫塚古墳の入骨	31
一 資 料	31
二 所 見	32
三 総括および考按	36
四 結 語	38

北海郡佐賀岡町周辺の調査	40
一 三柱神社の古墳	44
二 元金毘羅の石棺	44
三 中 広 銅 矛	45
四 応安六年銘宝篋印塔	48
五 陶 製 摺 鉢	49
六 王ノ瀬天満宮の家形石棺	49
佐賀岡周辺のゼネラル・サーベイ	51
大分新産業都市計画区域内遺跡調査をかえりみて	53

調査団の構成

昭和四十一年度、大分地区新産業都市計画区域域内の遺跡の緊急発掘調査は、大分郡野津原町と北海部郡佐賀関町において実施した。野津原町においては押型文土器を包含する黒山遺跡の発掘を、佐賀関町においては馬場古墳外敷基の古墳の発掘を、別府大学教授賀川光夫氏を団長として、次の通り調査団を二手に分け、昭和四十二年三月一日から同時に開始した。黒山遺跡の発掘調査は予定どおり三月十日に終了したので、一同は十日夕刻から古墳調査班に合流した。古墳の発掘調査もまた順調に進行し、三月十四日終了した。調査団の構成は次のとおりである。

一、黒山遺跡調査班

大分県教育庁	社会教育課主事	安倍 豪希
調査員	杵築高等学校教諭	入江 英親
	南九州大学助教授	鈴木 重治
	別府大学助手	橋 昌信
調査補助員	別府大学学生	富来雅勝 首藤卓茂
		谷 崎良晴 赤瀬 恵
		下玉利 勇 西村隆司
		木本 浩文 原田 修
		小野 良吉 石坂 妙

二、古墳調査班

大分県教育庁 社会教育課主事

調査員 別府大学 教授

九州大学 助手

別府大学 講師

調査補助員 別府大学 学生

橋本操六

賀川光夫

小田富士雄

後藤重巳

坂田邦博

岡部好修

江藤千鶴子

平山吉久

岡田宣宏

山田嶋常方

江上幹幸

酒匂義明

衛藤賢史

安楽勉

中村修身

野間重孝

工藤哲雄

中原栄子

調査経過

一、黒山遺跡調査班

三月一日 午前十時関係者一同野津原町教育委員会に集合。一応宿舍に落ちつき、発掘計画の打合せと器材の点検を行なう。昼食をすまして直ちに遺跡へ。今回の発掘は、先年古代学協会の試掘したという地点をさけて、道路ぞいの場所をえらび、二米幅のトレンチ掘りを開始した。

三月二日 前日に引続きトレンチの発掘作業を行なう。また遺跡の遠景写真の撮影をも行なう。

三月五日 朝からの小雨は後曇となる。始めて鎌が出土した。入江調査員は午後安倍主事と共に周辺の調査に出かけたが、特記すべきほどの収穫はなかった。

三月七日 道路をはさんで向い側の島の断面に、僅かに見えていた組合式石棺の発掘を本日から三名で開始。

三月九日 石棺外部の実測を終えたので墓石をあげたが、中には骨片が若干存するのみで副葬品は一物もなかった。石棺の調査は経過には完了したが、黒山遺跡の発掘調査も一応終了したので、両者とも埋めもどしを開始した。

三月十日 調査は予定期日どおり終了。本日は遺物を整理し、器材をまとめ、午後三時過ぎ一同古墳調査班に合流のため佐賀関町に向う。

二、古墳調査班

三月一日 午前十時関係者一同坂ノ市駅前の宿舍に集合。調査の打合せと器材の点検を行なう。昼食後直ちに馬場古墳に向う。

柄鏡式の前方後円墳である。後円部を中心に発掘を開始したところ、ここは太平洋戦争中に軍の監視所とされた場所で、既に完全に破壊されていることが判明した。よって発掘は中止し、実測班四名を残して、夕方から一同中ノ原古墳の方に移動した。

三月二日 測量班四名は馬場古墳へ、他は中ノ原古墳に向う。中ノ原古墳は南北の径約一二米程度の円墳であるが、盗掘を受けて、玄室の天井石は既に持ち去られていることが判明した。

三月四日 前日に引き続き馬場古墳の実測と、中ノ原古墳の発掘を行なう。朝からの曇天は曇を待たずに雨となり、遂に作業を中止した。

三月五日 天候の回復をまって午前十一時から作業を開始。昨日は銀環一個が美濃郡から出土したが、そのあたりから完形の須恵器が四点、土師器が二点出土した。また馬具類の破片も確認された。

三月六日 中ノ原古墳は発掘と平行して実測にもとりかかる。馬場古墳の測量班は本日をもって実測を完了したので、築山古墳の実測にうつることにした。築山古墳は既に佐藤虎雄氏による発掘ずみの前方後円墳で、後円部に二個、内部に朱の塗られた大きな石棺がある。この石棺は御神体として祀られ、発掘当時は多数の参拝者があった。出土した遺物は近くの神社に保存されている。

三月八日 中ノ原古墳の発掘は昨日をもってほぼ終了、あとは一部発掘と実測を残すのみとなった。よって坂田君ほか一名は築山古墳の石棺の実測を、小田調査員ほか二名は同古墳出土の遺物の実測を行なった。

三月九日 朝からの雨のため現地での作業は中止し、出土した遺物の整理を行なう。坂田君ほか二名は、近くの王ノ瀬天満宮に保存してある家型石棺の実測に出かける。

三月十日 調査を完了した黒山遺跡調査班一行が、夕刻から合流した。

三月十二日

中ノ原古墳の調査は、その発掘、測量、写真撮影等すべてを完了。築山古墳の測量も終了した。坂田君ほか二名は、古墳を中心としてそれに關係ある地区のゼネラルサーベイを行なったが、別段成果は得られなかった。

三月十三日

午前中は中ノ原古墳の封土の復元を行なう。かたわら石室内部にトレンチを入れて土層図を取る。また敷石を一部取り除いてフルイにかけ、多数の玉類を採集した。午後四時過ぎ宿舎に帰る。ゼネラル班は鍬形石の出土したという猪塚古墳のあとの位置を確かめ、近くの松林に祠を建てて人骨と共に埋葬してあった漢式鏡や、鉄斧の破片を持ち帰る。

三月十四日

昨日をもって遺跡の現地における調査は一応完了したこととし、器材その他の点検、遺物の整理等を終了し、引き揚げ準備を完了。バスにて大分市に出て解散。賀川、小田、鈴木、入江の四氏は県立図書館において猪塚古墳關係の記録の調査を行なう。

北海部郡佐賀関町の古墳調査報告

賀 川 光 夫
小 田 富 士 雄

佐賀関町周辺における遺跡調査のうち、今回測量なり、発掘調査を行なったのは次の四基の古墳についてである。

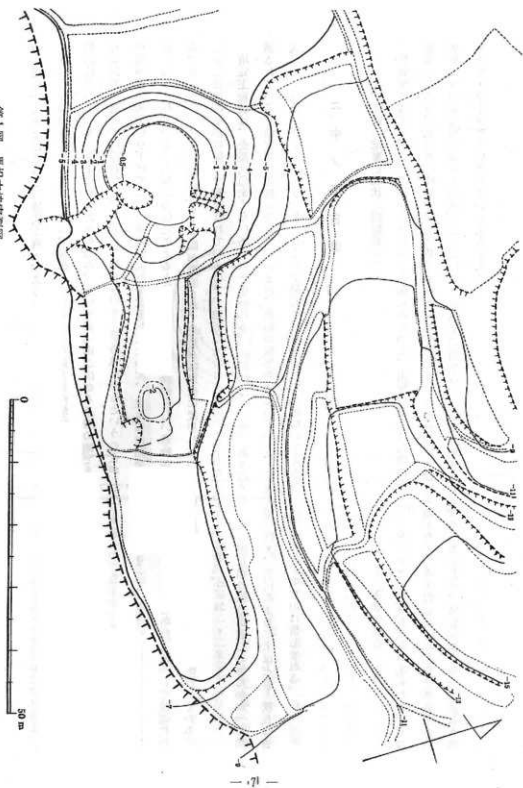
馬 場 古 墳	北海部郡佐賀関町馬場
中ノ原古墳	神崎字中ノ原
築山古墳	神崎字淨願寺
猫塚古墳	神崎

これらの古墳は後述する如く、四世紀代から六世紀代までにわたるもので、この地域の古墳時代の開始からはほぼ終末に近い頃までの変遷の概要を知ることができる。しかもこれらの古墳は墳形において、内部構造において、或は副葬遺物において、いずれもこの地方の代表的な古墳たる位置を占めている。また、一地方において、古墳時代の歴史を通観するに足る調査を行なうことができたという点でも成果をあげえた貴重な調査であった。以下、古墳別に報告する。

一、馬 場 古 墳

坂ノ市から佐賀関に通ずる国道の北側に馬場部落がある。この西南に接して国道で横断された丘陵の東端に一前方後円墳がある。今回の我々の調査に先だって、入江英親・岩尾松英の両氏がこの方面の遺跡踏査をした折に発見されて、発掘調査の候補にのぼったのである。この古墳のすぐ北側には組合箱式石棺が露出しており、すでに内部は発掘されている。また馬場部落の北西水田

第1圖 馬場古墳集積図



中に通称千人塚と称される円墳状の盛土がある。

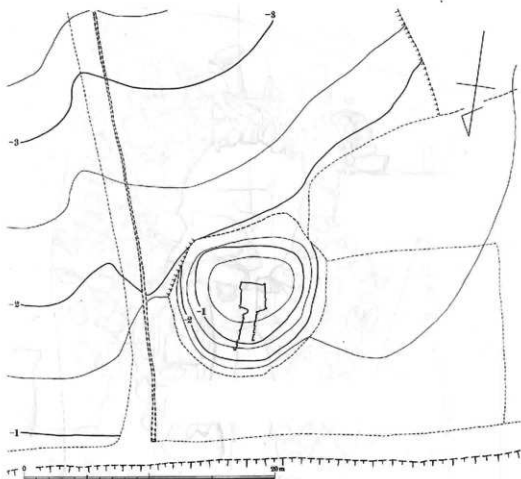
馬場古墳は海拔六米余の丘陵上に、東面して営造された前方後円墳である。丘陵を削って横断する国道の崖面に接して、その北側に位置している。眼下に馬場部落を望み、その背後に海が広がる景勝の地である。今日までその所在すら研究者に知られなかったのが不思議にさえ思われる。しかし、見通しのきく景勝地にあるということがこの古墳にとっては不幸であった。第二次大戦中、軍隊が後円部を掘り下げてここに防空監視所を設営したために、主体部は完全に発掘されてしまつて、トーチカ様の残骸が後円部深くのこされている。部落民の伝えによると、工事中に鋭や鉄剣らしい遺物が出土しているというが、その行方については遂に探索できなかつた。現在、周辺はミカン園が造成されて地形が階段状に変形している。前方部もならされてミカンが植えられている。しかしほぼ旧地形に従つて変形されているので、地形の大要は実測図の上でもたどることができる。

墳丘主軸長は、全長六〇米くらいあったと思われる。後円径は三〇米、高さ四米余、南の墳丘端は国道切通しの崖にかかつて切断されている。前方部は北側が削られているが、南側が原形をとどめていて、先端で幅一四米、後円部より二米ほど低く狭長な古式タイプの特徴を示している。おそらく五世紀前半代に比定して大過ないであろう。内部主体が不明なのは惜しまれる。

二、中ノ原古墳

1、古墳の位置と現状（図版第一）

佐賀関に通ずる国道の中ノ原バス停のすぐ南にあたつて、山標合地上に円墳が見えている。すでに天井石は取り去られて石室は露出しており、北向きに開口する横穴式石室の石室古墳である。この台地には他に古墳もなく、今では廃止された佐賀関鉄道が台地を切り通して石室のすぐ北側を通っていた。従つて以前からこの古墳は近隣に有名であつたらしく、俗に「おう塚」（或は大塚・王塚・ウー塚）と称されていたようである。

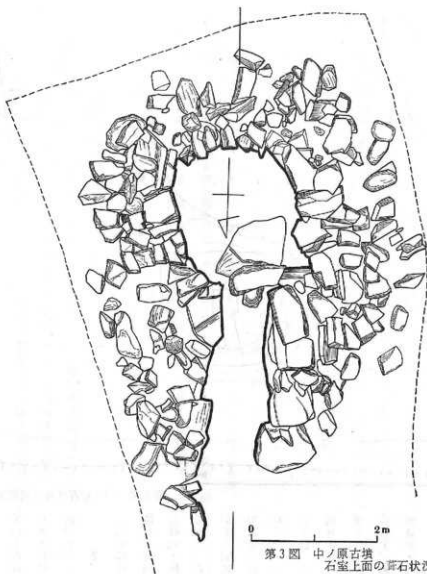


第2図 中ノ原古墳外形実測図

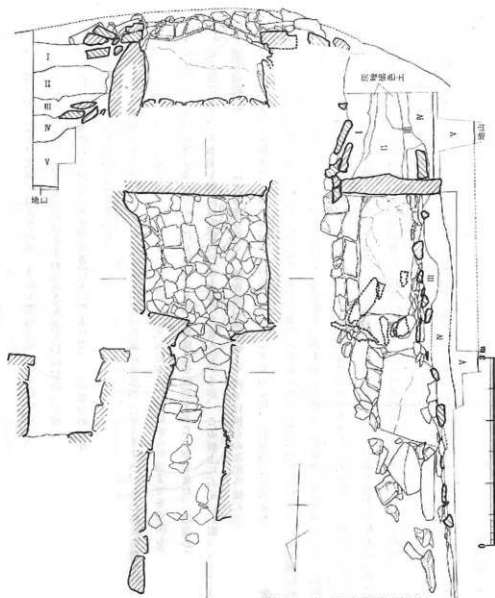
古墳は径十二米、高さは石室が露呈しているがほぼ二・五〜三米くらいであったと思われる。この古墳の西南五〜六百米のところに築山古墳がある。

2、石室の調査（図版第二一五）

石室はほぼ南北方向をとり、北向きに開口する横穴式單石室である。石室の全長は六・四米で、羨道が四・二米を占めている。さらに羨道は入口にむかって次第に石室に対して北東にふれてゆく傾向がある。石室は二・二米平方のほぼ正方形プランをもち、周壁は各々一枚石を横長く立てて腰石とし、その上に割石を平積みにして二段重ねに並べめぐらした構築法がとられている。石材はいずれも変成岩で、天井石がとられているが現存の高さ一・四米である。この石室上面の周囲にはこれを囲んで割石がかなり幅広く



葬かれており、この状況からみて天井の構架は現存の高さからさらにかなり高くなることはなかったであろうと考えられる。床面は敷石が一面にあるが、盗掘の際にはほとんど完全なまでに掘りかえされて、原状をとどめていると思われるのは壁面ぞいにわずかに見られるにすぎない。遺物も鉄鍔片や不明鉄片が二、三検出された程度で、十分に掘りつくされたようである。西壁は腰石がやや石室内に押し出されて傾いたためにその上に積み重ねた割石列が沈下し始めている。最も



第4図 中ノ原古墳石室実測図

よく原形を保っているのは奥壁と東壁である。

羨道は石室の左右に各々平石を立てて両袖石を形成し石室との境は幅七〇厘の通路をあげて開石がすえてある。羨道の幅は北に次第に開いてゆく傾向がみられ最大幅一・二米となる。石室袖石につづくあたりでは石室の周壁と同じように一枚石を立てて腰石とした上に割石を平積みする方法がとられ

るが、葬道の中ほどより北側では床面からいきなり割石平積みの手法にかわっている。床面には敷石があったと思われるが大部分がとり去られている。それでも床面は本来石室から葬道入口にむかって傾斜していたことはうかがわれる。

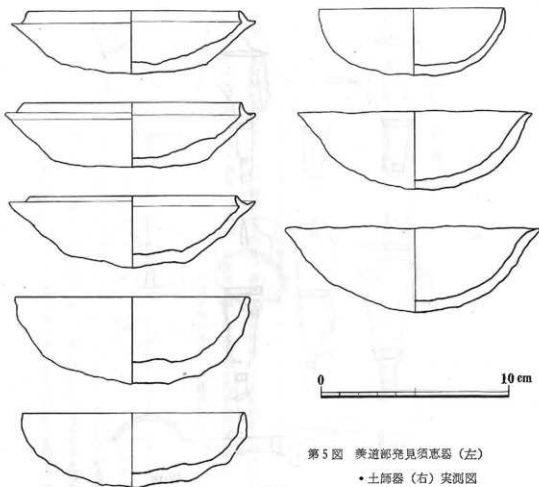
石室結石の間の通路の部分は、本来閉塞されていたようで、この部分の天井石が落下したその下に手ごらな栗石を積みあげて間を土砂で埋めた閉塞状況がのこっていた。

本古墳では盗掘がゆきとどいているので、石室内部の作業は予想外に早くすみ、この際に古墳築成の状況を調査しておこうと考え、石室奥壁の外側、東縁の外側、さらに石室床面の主軸線ぞいに奥壁から葬道までを切断して解剖を試みた。現在の墳頂から二・四米ほどで地山に達するがその上に大別して五層の堆積土を識別することができた。墳頂から一・八～二米で第Ⅴ層（暗褐色土）の上面に達し、この第Ⅴ層には先史時代の土器片を含んでいるが、この層上に石室の石組が組立てられているので第Ⅴ層上面が古墳築造時の地表であったと考えられる。第Ⅳ層（黄色砂土）内では腰石の基部分外側に割石を詰め更に第Ⅲ層（黒色砂質土）をその上に盛土する。これまでの過程は石室の内外共に同様にすすめられ、石室内では第Ⅲ層上面に敷石を入れて床面を構成する。以上を第一期工事過程とすれば、第二期工事は更に第Ⅱ層（暗黄色土）の盛土からはじまる。第Ⅱ層は石室周囲から墳丘の裾にむけて傾斜するように築造され、その上に同様な傾斜をもつ第Ⅰ層（褐色土）が盛られて墳頂に至る。この間、石組腰石の上に割石が平積みされて、石室周囲にも盛土の傾斜に沿って墓石が配置される。そうして天井石を構築するまでの過程がある。

以上のような石室構造と墳丘築成の過程は、横穴式石室古墳の構築法としては最も普遍的な方法であったと思われる。横穴式石室古墳としては小形の部類に属し、特別精巧な構築というほどの特異性も指摘できないからである。

3、出土遺物

石室内は完全にちかいまでに盗掘されていたが、葬道部の北半部からいくつかの土器、鉄器が散乱して発見されて年代推定の手がかりを得たのは幸いであった。



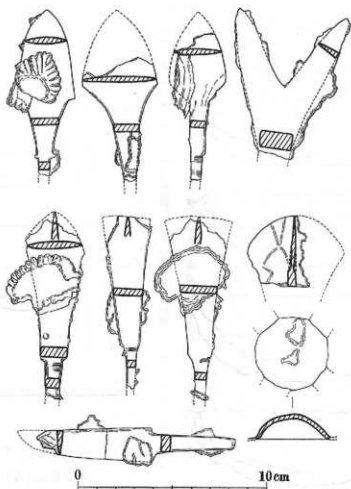
第5図 美道部発見須恵器(左)

・土師器(右)実測図

須恵器 甕の破片若干と坏の蓋と身がある。坏は口径十一・十二釐で製作はやや粗雑である。いわゆる身の方は蓋受けの立上りが内傾して短かく、蓋も厚みの差が部分によって大きい。器形上の特徴から第IV期の須恵器に比定できる。この時期の須恵器は第三期までのものとくらべていわゆる蓋受けのある身が蓋になる例が多いので、蓋と身が逆転することも考慮しておかねばならない。

土師器 径十・十三釐くらいの丸底坏がある。口縁のつくりは寛みがきの施された精巧なものと、やや粗雑な胎土のあらいものがある。須恵器の年代と同じ頃に比定してよいであろう。

鉄鏝 鉄鏝はかなり副葬されていたらしく、実測図を作成したものも多



第6図 鉄製品実測図（鉄鏃・刀子・辻金物）

い。いずれも平根式のものであるが、大別して斧箭式と三角形式と雁股式の三種となる。なかでも斧箭式のものが多い。いずれも後期古墳にみられる形式のものである。

刀子 先端が欠けているが復原金長十一・五釐、そのうち茎長は四・二釐を占める。茎は刀身の背からそのまま続かず両面式である。

辻金物 径三・八釐の半球形座金で四脚があったと思われるが欠失している。これによって馬具の副葬されていた事実が判明した。

以上の遺物の種類と組みあわせから本古墳の年代は六世紀後半に比定される。

三、築山古墳

1、調査経過

中ノ原古墳の西南五、六百米、神崎部落の南に接した丘陵の末端に築かれた前方後円墳である。この古墳については大正時代に梅原末治博士の現地踏査の報文がある。^①当時まだ内部主体や遺物についての調査見聞はなかったが、後藤碩田の「尚古延寿」に神崎村出土と伝える鍬形石、漢式鏡の拓影が収録されていることに注目され、当時他に適当な畿内系古墳も見あたらなかったため、この古墳の出土品であろうと推定されたのであった。以来、畿内の古式古墳に多いこのような遺物が出土したという事実は、研究者の注意をひくにいたった。

築山古墳には古米埋蔵物があるという伝承がまつわっていたようであるが、ここに村社八幡神社が鎮座しているところから、墳丘の一部は境内となっていた。昭和七年四月、神社で樹木移植のために鍬を入れたところがたまたま石棺二個が埋没してあるのに当り、時の大分県史蹟調査委員十時英司、久多羅木儀一郎の両氏と氏子総代等が立会って石棺を開き内部の調査を行なった。その後、地元から京都帝國大学教授西田貞二郎氏に調査依頼があり、佐藤虎雄氏が調査するところとなって、昭和十年に報告書が刊行せられたのであった。^②

以上の経過によって、問題の鍬形石、漢式鏡が築山古墳の出土品でなからうと考えられるようにはなかったが、この報告書の流布範囲がせまかったため、築山古墳の実態が十分研究者の間に知られないままに今日にいたっている。従って依然として梅原博士の推定せられた鍬形石、漢式鏡が築山古墳出土であろうという報告が広く知られている感があった。

筆者は以上のような事情から、築山古墳の実態を調べ、更には鍬形石などの出土地をつきとめたいと年来考えていたので、今回の調査を機に年来の疑問を解決したいと思っていた。中ノ原古墳調査の余力を得て、築山古墳の墳丘測量図がこれまで公表されて



第7图 箕山古墳実測図

いないところからその測図作成と、現在社宝として八幡神社に保管されている出土遺物の再調査を企図したのである。幸い、神社総代佐藤林氏等の御協力を得て短時日ではあったが遺物の調査も行なうことができた。本報告は、墳丘測量と遺物の調査についての結果を、佐藤虎雄氏の報告書を参照しながらまとめたものである。

2、墳丘の測量（図版第六）

築山古墳は北海道部佐賀岡町神崎字淨願寺にある。神崎部落の南にそびえる山の麓にあたる北端を利用して築造された西向きの方後円墳で、坂ノ市から佐賀岡に通ずる国道を眼下にのぞむ要害の地を占めている。八幡神社は後円部の北東裾を一部削って整地した位置にあり、墳頂まで石階を設けていて、神社敷地から十米近い高さで墳頂に至る。

古墳の全長九〇米、後円部径四〇米、前方部最大幅四五米で前方部はやや広がつているが、後円部頂より二・三米ばかり低い。従って前方部が低くて長い古式タイプの特徴をとどめている。前方部は畑地になっていたのややかきならされていると考えられる。くびれ部のあたりで前方部と後円部を切断する掘り切りが古墳を横断していて、この切通しで観察すると、前方部はほとんど地山を削っているようで、盛土の境界を明確にすることができなかった。また前方部の周囲に葦石があった形跡が、この切通し断面や前方部先端の一部に認められた。古墳と山の尾の間には幅二〇米ばかりの低地がめぐり、後円部の東南には池がある。前方部の北側にも池があったらしいが社務所の建設によって埋められたらしい。梅原博士や佐藤虎雄氏も推測された如く、周濠がめぐっていた可能性は大きい。現在後円部から南の山の尾に通ずる捷路をつくっているが、古墳築造時には山の尾との間に濠を掘って一種の丘陵切断法によって墓域を設定したのではないかと思われる。

後円部頂上は、昭和七月に発見された石棺一基が南北に各々東西南方向をとって並置されている。両者の間隔約二・四米で、それぞれ石棺を囲む覆屋を設けているが、北棺は両棺の被葬者をあつめて再埋葬し、棺上に砂礫をかぶせているので現在みることはできない。南棺は支柱を入れて棺内が見られるように設備されている。現在この二基の石棺は八幡神社の本体の如き観を呈し、「石

棺さま」と称されて近隣の部落民の信仰をあつめている。

3、南棺の構造—付・北棺の構造—（図版第六—七）

南棺はこの近傍に産する緑泥片岩を使用した大形石棺で、四壁各々一枚石で組まれ、床面も一枚石を敷き、蓋石も一枚石で計六枚の板石を組合せてある。東、西の両小口壁石を立てて、これに南、北の壁石をあわせたもので、南北の壁石には小口石が嵌入できるように削りこみを設けている。また蓋石にも棺身に被せた際、密着するように幅十二匁、深さ四匁の削りこみを溝を長方形にめぐらしてある。棺身は内法で東西一・九五米、南北幅七五匁、深さ八〇匁である。蓋石は長さ三米、幅一・二五米の大形板石である。

現在南棺の北に埋まっている北棺は、佐藤虎雄氏の報告によれば南棺より小さいが、大体同様な構造を有していた。内法は長さ一・八米、幅六四・五匁、深さ七二・八匁で、床面には海岸の小石を敷きつめていた。蓋は二枚の石をあわせたもので、長さ二・四八米、幅九一匁となり、棺身を上げるための嵌込溝がつくられている。

なお、佐藤虎雄氏の報告では南棺と北棺をとりちがえている。すなわち北棺を大石棺で床に敷石があるもの、南棺を小石棺で床に小石を敷いたものとされているが、これは南北をとりちがえたものである。

4、被葬者と遺物（図版第八—九）

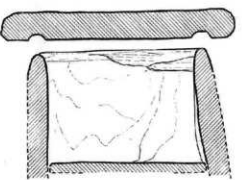
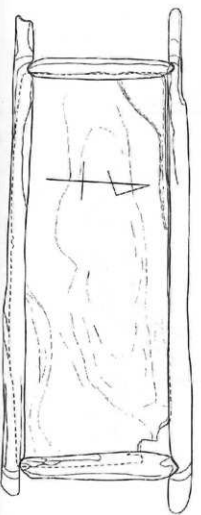
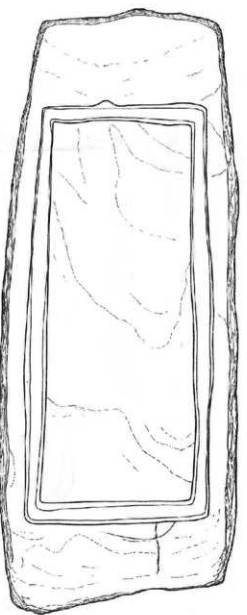
発掘当時の様子を佐藤虎雄氏の報文によって整理しておく。

南棺 被葬者は三体あり、南側から順次A、B、Cとすれば、

A、頭位西、五十才代、推定身長一五九匁。

B、頭位東、推定身長一四七匁、女性、右腕に貝釧着装。

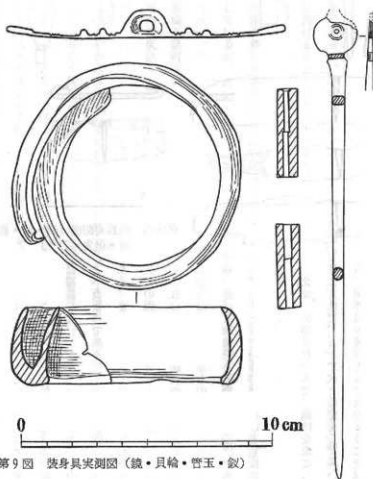
C、頭位東、推定身長一三八匁。



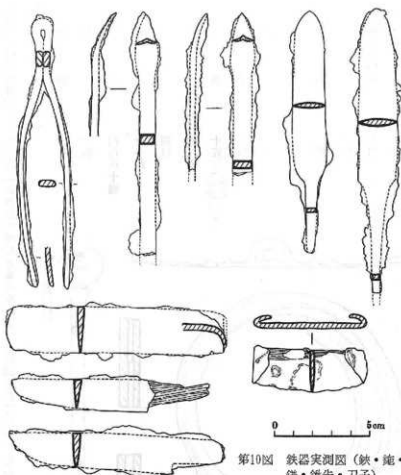
遺物はB、C人骨の頭間に振文鏡が鏡面を上にしてあり、東壁に接して刀剣、鍔があり、南壁に接しては刀剣が堆積し、東南隅にはその他の鉄器があった。なお副葬品の種類と量は次のように登録されている。なお（ ）内数字は今回、筆者の調査で確かめた量である。

振文鏡	一面
貝釧	一個
小玉	約百八十個
刀	十一口
劍	四口
鍔	約九十口
斧頭	十五口(斧頭5、鍔先13)
刀子	二口(4)
鍔	二口
鍔	三口
鍔	二個
鍔	一個
棒状鉄器	六個

振文鏡は径十一・四種、緑錆をかぶり、鏡背に布片が附着しているので、布で包



第9図 装身具実測図(鏡・貝輪・管玉・釧)



第10図 鉄器実測図(鉄・鉋・鉋鎌・鉋先・刀子)

まれているのであろう。貝鉋は径九厘のイモガイを輪切りしたものである。小玉はコバルト色のガラス製である。刀、鉋は現存しないが、なかに源頭太刀一口があったようである。なお鹿角装鐙一個がある。また斧頭として報告されたものは鉄板の両端を折りまげて斧頭とするもの五口と、佐藤氏報告で斧頭としているが実は鉋先になるもの十三口に分たれる。鉋には柳葉形と三角形の二種がある。金鉋としているのはいわゆる毛抜形鉄器である。

北棺 被葬者は一体で、頭位を東にむけた女性で、五十才代と推定されている。副葬品の種類と量は次のように登録されている。

管玉 二個
銅(卷貝) 一個

劍（二枚目）

十個

管玉は碧玉製で穿孔は両側りである。貝劍は二種あり、一個はイモガイを輪切りしたもので南棺のものより小さい。十個は二枚貝であるが、種類を同定するにはいたらなかった。二枚貝の十個は両側に五個ずつ着装され、別に右腕尺骨にイモガイが着装された状態で発見されている。

以上が南北両棺の被葬者と副葬遺物の概要であるが、詳細は佐藤虎雄氏の報文に説明があるので省略した。従って遺物の写真、実測図も筆者の作成したものからその一部を掲げるにとどめた次第である。

5、小 結

後円部に併置された二個の石棺のうち、三休合葬した南棺が副葬品の質量からみて主棺であろう。特に鉄製武器、工具は種類も多く、五世紀代の古墳の特徴をよくあらわしているが、特に九州では類例の少ない坂文鏡が出土していることは注意される。九州における坂文鏡の出土例は、

谷口古墳（前方後円） 佐賀県東松浦郡浜崎玉島町谷口

五反田古墳（円） 熊本県八代市敷川内五反田

重光古墳（円）

大分県杵築市重光

が知られている。坂文鏡の行なわれた年代は四世紀から五世紀中葉にわたるといわれるが、本古墳出土品は坂文鏡のなかでも未だ簡略化はすすまず、原型をよくのこす類である。鈕孔や鏡縁には使用によると思われる磨滅の痕跡があつて、ある程度の伝世も考えられる。本古墳の年代は各種鉄器や前方後円形などを参考して五世紀中葉に近い頃に比定できよう。この地方では最大の古墳であることからみても、五世紀中葉頃に最大の首長権が発揮されるにいたつたと思われる。

註 ④ 梅原未治『北海道に於ける二三の古墳』（『歴史と地理』十二卷三号）大正十二年

③ 佐藤虎雄「築山古墳」昭和十年

④ 伊藤嶺樹「桜文鑑小論」(『考古学研究』十四卷二号) 昭和四十二年

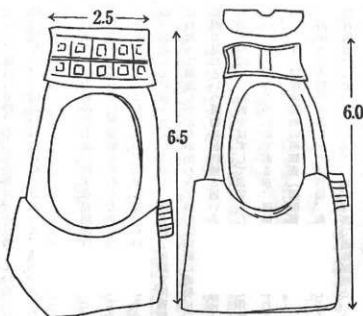
四、猫塚古墳

1、発見の事情

築山古墳の項でも述べた如く、梅原末治博士が推定された「尚古延寿」にみえる鯢形石と後漢鏡が築山古墳出土であろうということが当たらないことが明らかになってみると、それらの遺物が出土した古墳は近傍の他所に求めなければならなかった。筆者がこの地域の調査に際しての最大の関心事は、「尚古延寿」にみえる遺物が出土した古墳の実態をつきとめることにあった。調査終了の期日がせまったにもかかわらず、期待をかけた築山古墳の調査が終って、筆者の念願もむなしくなって、いよいよ焦りを感じてきた。ところが調査が終了するという前日になって、「尚古延寿」にみえるこれらの遺物が「海部郡神崎海岸院」に所蔵されているという記載をたよりに、近傍の住民に聞きこみを続けていたところが、海岸寺という寺が築山古墳の西北約一軒の海岸近くにあって現在還俗した住職がいることを聞きこんだのであった。① 漢をもつかむ気持でかけつけて当主の久留嶋忠熊氏にお会いした。久留嶋氏の話によると、祖父の代に寺の裏(現在ミカン園)に猫塚と称されるに古墳があったが、整地するためにこれを発掘したところが石棺が現われ、二体の人骨や遺物が発見された。これを寺のすぐ北にあたる海岸丘陵に墓に納めて再埋葬し、上に祠をつくって、以来まつてきているということであった。また鯢形石についてたずねてみると、祖母からの聞き伝えに手のひらくらいの大きさの石で中央が割ってあるものがあつたという記憶を話してくれた。そこで鯢形石を出土した古墳はまさしくこれにちがいないとの確信を得て大いに喜んだのであった。そこで久留嶋氏にお願ひして再埋葬しているところを発掘させていただく了承をとり、翌日供養をして再発掘のはこびとなったのである。

2、遺物に関する記録

我々の調査について述べる前に、梅原末治博士が紹介された「尚古延寿」の内容についておく必要がある。次に梅原博士の報告を抜萃しておく。



第11図 海岸院蔵 狐銀石（単位・寸）

（略）ここに特記に値するのは本古墳（筆者註―築山古墳）調査後日名子氏（筆者註―当時の大分県調査委員日名子太郎氏）から借用した後藤碩田の「尚古延寿」の一冊に本村（筆者註―神崎村）出土と推定せらるる狐の銀石二個と立派な漢式鏡一面との拓影が載せられたことである。此の「尚古延寿」と云ふのは三冊あつて、碩田が獲た古物の拓影をはりこんだ帖子で、如上の遺品は其の一冊の束葉に、

本州海部郡神崎海岸院所蔵神代物押形並漢鏡破一面

として、（中略）長六寸と六寸五分との二個の狐の銀形石の拓影を収めてその一に

黒質玉邊而作之

と注し、また径五寸五分と推定せらるる漢鏡の破片七八個の拓影を載せて

此外玉石多カレトモ元ノ古墳ニ埋メシト云ヒ、此墳墓ヲ掘キレハ文久三年ノ頃トゾ

として、慶応三年卯、十二月後藤真守と自署している。鏡は破砕しているが上に摺形が拙なので全構図は明でないが平縁式的神獸鏡と覚しく、一段高い外区は幅六分あって、魚形や禽獸などを鋭利な縁で表はしている処、後漢頃の遺品と認めらるるものに近しい。^②(後略)

以上がこの古墳の出土品に関する見聞記録である。ところで久留嶋氏の話によると、かつて別府市内の日名子太郎氏が経営する旅館で、鉄形石の拓影掛軸を見たことがあるというのであるが、現在の日名子旅館は代移り、経営者も変わって不明である。おそらく骨董商の手にでもわたって転々しているのではなからうか。日名子氏旧蔵の「尚古延寿」三冊は現在大分県立図書館に碩田叢書の一部として収蔵されているので、調査終了後県立図書館に赴いて碩田叢書を検索することができた。しかし「尚古延寿」を再三にわたって調査したにもかかわらず海岸院旧蔵の遺物についての記載は見あたらず徒勞に終った。そこで久留嶋氏がかって日名子旅館で見たという遺物拓影掛軸と思ひあわせて、梅原博士調査の折にこの遺物の重要性について注意をうけ、「尚古延寿」からの部分の記録、拓影をはずして表装したのであらうと推察せざるをえない。かくして後藤碩田が記録してより一世記を経た今日、その遺跡をつきとめたのであるが、碩田の記録は失われて遂に探索の手がかりは断たれてしまった。

3、猫塚埋蔵物の再調査(図版第一〇—一三)

海岸寺は佐賀関町神崎部落の西端、海岸に面したところにある。海岸ぞいに低丘陵が形成されており、久留嶋氏の祖父の代、「尚古延寿」によれば文久三年に海岸寺裏で通称猫塚という一古墳が発掘された。内部主体は箱式石棺であった。墳形については円墳であつたらしいが、仮りに小さな前方後円墳であつたとしてもそれに気付いたかどうか疑わしい状況であつたろう。現在ミカン園となつていて墳形を推定すべき手掛りは失われている。前述したように箱式石棺からは二体の人骨と副葬品が発見されたが、要に収容して海岸の丘陵に埋葬し、石棺の石材で上を覆ひ、その上に小さな祠をつくつて当主久留嶋鬼熊氏までまつて来たのである。要の上に葺かれた石棺材材は八〇×一六〇㎝、六〇×八七㎝、六〇×八〇㎝などの大きさの結晶片岩質板石である。祠堂を、つ

づいて板石をのぞくと大きな素焼甕が直立した状態であらわれ、口縁より少し下まで土砂で埋まり、その上に枯葉が若干入っていた。久留嶋氏の話では大正十年頃に一度この甕を掘り出したことがあり、そのときに素焼土器片があったがこの周辺にとり出していたためにその後なくなったということである。土師器の類でもあったのではないかと考えられる。従って今回の我々の発掘は大正十年につづく一度目の発掘ということになる。

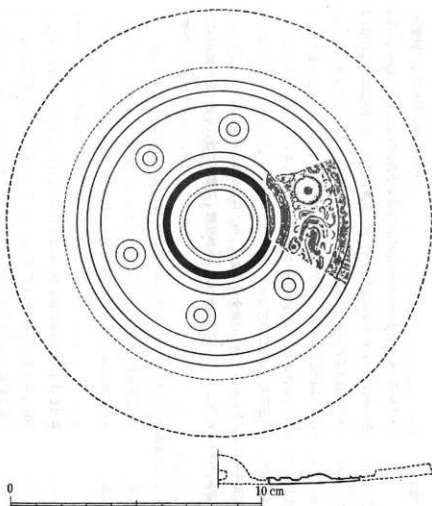
甕の中の発掘によって二個の頭骨とその他の人骨の部分が多く発見されて二体分の人骨が合葬されていたことが実証された。人骨にまじって鏡片一と土製玉一、刀子一、鉄剣二以上、鉄牙一の副葬品が発見されたが、土製玉をのぞいてはいずれも破片である。刀子、鉄剣、鉄牙は破片を接合してある程度復原することができた。以下遺物についての観察を記しておく。

鏡片 一個 (図版第一二上)

内区文様帯の一部分にあたる鏡片一個がある。鳥文と思われる図形と円座を有する乳文各一個がみえており、その外側に銘帯と摘舌文帯がめぐらされている。銘帯には「羊」字が一字みえてい。鳥文は後漢の細線式獸帯鏡の系譜をひくものと思われるが、やや半肉彫りの手法に近づいており、また鈕をめぐる幅四耗の円座帯には楷円や、これを囲う一種の曲線文の陽出があつて三角縁神獸鏡との近縁要素が指摘できる。梅原博士の報告によれば、「尚古延寿」に収められた漢鏡の拓影は破片七八個といわれるから、文久三年の発掘でかなり破砕したことがうかがわれる。また梅原博士はこれらの拓影から平縁式の神獸鏡と推定され、外区は幅六分で魚形、禽獣がめぐっていたというから、今回発見の一鏡片と同一個体であろうと考えられる。そしてこの鏡片から復原できる鏡の径は一七厘弱となる。これに乳座を配置すれば六等分することができるので、一種の大獸鏡であったと考えられるのである。鳥獸文の手法、銘文の書体などから後漢代に比定することができる。厚さ一・五耗。

土製玉 一個 (図版第一二下)

径二・四厘の赤褐色土製素焼で、一部に削りこみがある。孔径六耗。



第12図 漢鏡片復原図

刀子 一口（図版第一三上）

鉄剣の一面に錆着している。

茎が欠損していて、現存長七・

八櫛ある。刀身部は長さ六櫛、

身幅一・二櫛、厚さ二耗であ

る。

鉄剣 二口以上（図版第一三

上・下）

短剣と長剣の二種がある。短

剣は五個の接合できる破片から

なり、接合してみると、茎尻を

欠失しているが、現存長一八・

二櫛、身幅二・五櫛、厚さ四・

五耗ある。

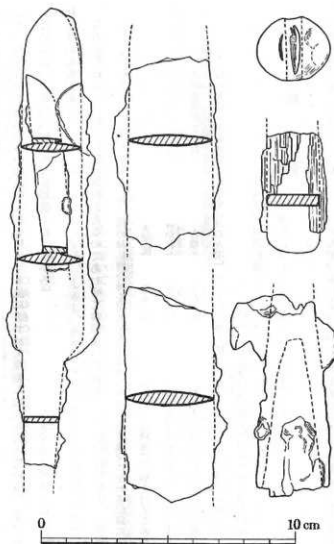
長剣は破片数個から成るが、

剣身幅が三・五櫛、厚さ四・五

耗という実測値からしても少な

くとも長さ五〇櫛を超える長剣

鯨形石 二個（第11図）
 現存しないが、梅原博士所引の「尚古延寿」収録拓影のスケッチによれば、長さ六寸と六寸五分の二個あり、上部結節の部分に刻線による施文がみられる。鯨形石の形態はやや長手で、中央の割り穴も楕円形となり、小林行雄博士の分類に従えば鯨形石の新しいタイプに属する。黒質の玉造という社記からして碧玉製であったことが察せられる。



第13図 土製玉・刀子・鉄剣・鉄矛実測図

であったといえよう。茎
 尻の部分が発現し、木質
 の附着力がみられるので着
 柄されていたことがうか
 がわれる。

鉄矛 一口（図版第一
 三下の右端）

袋の部分が接合によっ
 てほぼ完形に復原でき
 た。現存長七・四釐。身
 のつけ根で折れているが
 径二・九一・七釐、袋
 内の奥行六釐である。

4、小 結

豊後神崎の地方に鯨形石と漢鏡を出土した古墳が在るという事実、梅原博士の紹介以来、古墳研究者の間に注目されてきたのであるが、その出土古墳については不明確のままに今日に至った。今回の調査は我々の探索のかいあって遂にこの古墳の実態をつきとめることができたのはまず大収穫というべきであった。この古墳はわが国の古墳中、鯨形石を出土した古墳の分布においてその最西端の位置を占めるものであり、これが後漢鏡を伴って発見された数少ない四世紀代に比定できる明確な古墳の一つでもある点で、高塚古墳出現期のこの地方の文化を研究する上にきわめて重要な地位を占めている。またこのような伝世鏡と碧玉製腕飾の組合せによって初期大和政権の浸透度を推しはかるうとする考古学的研究をすすめる考え方に立つとき、本古墳の遺物もつ意義は大きいものがある。

なお再発掘の人名については別稿があるのであわせて参照せられたい。

註

① 海岸寺は馬介山大明神という一種の神仏習合神を祀る牛馬守護神である。久留嶋家に伝わる記録によると、京都三木郡を本山と仰ぐ代々社僧の家柄で、補任状によると「太字院某」とある。伝説では寺の裏にあった猫塚に邪猫を封じこめたといわれ、猫塚の轡はこれより発したようである。当初は豊介山と書かれたが後に牛馬守護に転化してより馬介山と改めたという。大友能直の時、兵火にかかって焼失し、その後復興されたと伝えられる。古墳を発掘した久留嶋氏の祖父は明治十二年系図によれば久留嶋館という人であった。

② 梅原末治「北海紀行に於ける二三の古墳」(大分県史蹟名勝天然記念物調査報告第二輯、「歴史と地理」十二巻三号)大正十二年

③ 小林行雄「前期古墳の副葬品にあらわれた文化の二相」(「古墳時代の研究」所収)昭和二十六年

五、結 語

佐賀関町馬場、神崎地区における四基の古墳調査によって、四世紀末から六世紀後半にいたる古代の海部郡佐加郷における代表

的古墳をはば全部にわたって知ることができた。現在のところ古代佐加郷の古墳では他にこれ以上の意味をもつ古墳は発見されておらず、畿内と交渉をもった遺物なり墳形をもつ古墳も知られていない。

この地にはじめて畿内の古墳文化が到達した事実を裏証するのは猫塚古墳である。後漢代の伝世鏡と碧玉製鯨形石を所有し、外形は円墳であろうかと考えられる程度で疑問は残るけれども、この古墳の被葬者ははじめて畿内古墳文化に浴した人物であったといえる。すでにこれに先行するものとしては北九州では福岡県の石塚山、原口などの古墳、大分県の宇佐赤塚古墳などがあるが、これらの古墳につく副葬品をもつ点で重要な古墳であり、少なくとも四世紀末を下らない時期であるところに少なくとも豊後地方最古の畿内系古墳としての位置が与えられるのである。したがってこの地方がいち早く大和朝廷の九州進出の過程でその版図に入ったことが知られるのである。

猫塚古墳に端を発した畿内系古墳文化は五世紀代にはいるとやがて前方後円墳としての馬場古墳にうつがれ、中葉頃には築山古墳へと発展していった。築山古墳は外形においてもこの地方では最大の前方後円墳であり、副葬品には多くの鉄製武器の副葬をみて中期古墳としての特徴をよく発揮している。しかし、内部主体には伝統的な組合箱式石棺の合葬を採用している。しかしこのような在り方は築山古墳だけではなく、九州各地にもみられるところであって、むしろ九州の特性ともいえることである。五世紀中葉に最盛期をむかえたこの地方の族長墓は、その後ひきつづいてこの地で発展したのでなく、急激に衰微していったようである。やがて六世紀後半に中ノ原古墳が築造されるまでみるべき古墳が指摘できない。中ノ原古墳はこの地方では最も目につく存在ではあるが、横穴式石室古墳としてはその構造を解剖調査してみても特徴あるものとはいえないのである。従って、築山古墳か中ノ原古墳に至る約一世紀の空白がこの地方の首長権に後退をきたした時期にあたることになる。この時期には佐加郷にあたる大分市坂ノ市方面に王ノ瀬天満宮の家形石棺や亀塚前方後円墳などのみるべき古墳が出現してくることは見のがせない。さらに次第に大分平野とその周辺に代表的な古墳が集中してゆき、やがてこの地に律令時代に国府が設置されるまでの動向のなかで海部郡の占

める地位が変動してゆく過程を考えるべきであらう。

海部の起源は応神紀五年に諸國に海人部を設置したのはじまる。すなわち漁獵を職掌とする朝廷への奉仕集団であって、これが地名化したものである。古来、海部郡一帯には漁獵を生業とする白永郎が居住していたことは「豊後風土記」にも記されているが、彼等を海人部として組織し、統率する首長があり、その一族に海部姓が与えられたのである。「続日本紀」延暦四年正月条にみえる豊後国海部郡大領、海部公常山なる人物は、この地方の海部一族を支配した首長の後裔である。元来、海部は朝廷に海産物を貢納する賁の民であると共に製塩にもたずさわったようである。「豊後風土記」海部郡神門郷の名称の由来を説明した条に、「繼向日代宮御宇天皇御船、泊於此門、海底多生海藻而長莖。天皇即勅曰、取最勝海藻訓後都米便令以進御。」とあるのはこのような性格をあらわしているであらう。したがって畿内系遺物を所有する狹塚古墳の出現はこのような海部設定と無関係ではなく、このあたりにいち早く古式古墳が成立するにいたった原因も察せられるのである。また景行天皇の皇子兒彦命が大分穴穂御埼別といひ、海部直等の祖と伝えられるところをも参照して、律令時代以前には海部直を伴造とする品部集團を形成していたことも推察されるのである。

一方、佐賀関と瀬戸内とを連絡する豊予海峡は、古くは通吸之門と称される渡海の難所で、その名の如く今なおしばしば遭難するところである。神武天皇東征説話のなかにも国神珍彦がその征船を導いた功によって稚根津彦の名を賜ったという伝えがあり、佐賀関に稚根津彦神社があることから大和朝廷の朝鮮出兵その他瀬戸内交通が著しくなる四世紀末から五世紀代にかけて海部一族が瀬戸内交通にパイロットとして重要な役割を果たしたであらうことも推察に難くない。狹塚から馬場古墳へ、さらに築山古墳へという発展の過程はこのような歴史的展開のなかで理解されるのではなからうか。したがって五世紀後半からの大和朝廷の対外的後退、国内政治の矛盾激化は、海部一族の担った役割の後退へとつながるものであたらう。海部直家の墳墓と考えられる畿内系古墳の出現から盛時へ、やがて衰退へという消長はこの間の事情を如実に示しているのではなからうか。(文責・小田)

猫塚古墳の人骨

内 藤 芳 篤

ま え が き

ここに報告しようとする人骨は本報告書（古墳の調査猫塚古墳の項）に詳述されているように、文久三年大分県北海部郡佐賀岡町神崎所在の古墳より見いだされ、再埋葬されていたのを、一九六七年三月同地方の緊急調査の際に再度発掘されたものである。

猫塚古墳は箱式石棺を内部主体とする小円墳で、時期的には四世紀末に営まれたものであるという。⁽¹⁾

箱式石棺内に合葬されていた二人の人骨は初回の発掘、再埋葬などの過程において四肢骨はほとんどこわされているが、二個の頭蓋骨は比較的よく保存されていた。

著者はこれら二人の人骨について観察および計測をなすと共にすでに報告されている古人骨との比較検討を行なったので、その概要を報告する。

一、資 料

再発掘された人骨は明らかに二個体で、そのうち頭蓋骨は二体分共に比較的よく保存されていたが、四肢骨はほとんど破砕され、接合復原することは不可能であった。

一号、二号とそれぞれ番号を附したが、後述する通り二体共に頭蓋骨の形態より男性人骨と考えられる。また頭蓋縫合、歯牙の

咬耗度などから兩人骨は壮年期のものと思われるが、そのうち一号人骨は三十才代、二号人骨は二十才代前半のものとして推定される。

四肢骨および軀幹骨は大部分が小片となっていたが、大腿骨、脛骨、上腕骨、桡骨および尺骨などから二個体のものであることは確実である。その他肩甲骨、寛骨、肋骨および椎骨の一部が残存していたが、椎体を見ると、胸椎では平滑で若年者のそれと想わせるのに反し、腰椎では頭蓋縫合や歯牙の咬耗度から推定される年令に相応しないような変形を示しているものがあつた。

二、所 見

(一) 着 色

一号、二号人骨共に頭蓋骨の前頭部より顔面上半部にかけて鮮紅色の着色がみられた。その色調より明らかに朱(Ⅱaの)を成分とする顔料を使用したものと思われる。⁽²⁾

着色部位は、一号人骨のばあい、前頭骨では前頭鱗の左右側頭縁より内側で、冠状縫合の前方(一三の)の縁より額全縁に、また鼻骨全周、頬骨および上顎骨の上半部であつて、結局額と眼窩の周辺部に強く着色している。その他、頬骨および上顎骨の下半部、下顎骨あるいは頭頂骨、側頭骨などにも部分的に着色している。四肢骨および軀幹骨では着色をほとんど認め得ない。

二号人骨においても一号人骨の着色部位と全く同様であるが、一号人骨よりもはるかに稀薄であつた。

以上のような着色状態から按ずるに、箱式石棺内に二遺体を仰臥位に並列させて、頭部の表面を朱(Ⅱaの)を成分とする顔料でおおつていたものと考えられる。

二 形 質

一、頭 蓋 骨

猫塚古墳人骨の頭蓋骨を全体として観察すると、脳頭蓋では前頭部の膨隆は弱く、後方にかなり強く傾斜しているが、側頭線および乳棟突起の発達は著明でない。一号、二号人骨共に外後頭隆起が突出し、とくに一号人骨では後頭部が後下方に突き出て、いわゆるサイ楯頭に近いものとなり、また上項線がよく発達しているが、その下部の項平面は急に水平に近づき側面よりみると長頭の傾向が認められる。縫合は比較的密で鋸齒状を呈する部分がみられたが、内、外板共に鑿着は認め得なかった。

顔面頭蓋では二号人骨のばあい前頭縫合が鼻根部に近く僅かに残存している。また両人骨共に眉上弓がよく発達しているが、鼻根部の隆起はきわめて低く、鼻骨の幅も著しく狭い。頬骨弓幅、頬骨弓などは外側方に強く張り出すこともなく、全体として角張った感じはない。眼窩および梨状口も顔面形態に相応した形状を現わしている。

計測 猫塚古墳人骨の頭蓋骨計測値の主なるものは附表に示す通りである。⁽³⁾これらの計測値と、すでに報告されている縄文人骨⁽⁴⁾、⁽⁵⁾、弥生人骨⁽⁶⁾、⁽⁷⁾、⁽⁸⁾、古墳人骨⁽⁹⁾、⁽¹⁰⁾、⁽¹¹⁾（津雲、吉胡）、弥生人骨（北井ヶ浜、三津、深堀）、古墳人骨（西日本古墳、畿内古墳）および現代人骨（西南日本）の成績と比較しながら検討してみたい。

一号人骨 頭最大長が一八四^ミ、頭最大幅が一三七^ミ、Bp中^ミ高が一三四^ミで、長幅示数は七四・四六、長高示数は七二・八三幅高示数は九七・八一となり、すなわち頭型として分類するならば *dolichokran*, *orthokran*, *mesioikran* に属している。

これら三径と、三径よりみちびかれる示数について数値の上から比較諸群との関係をみるならば、一号人骨は著しく長頭であることが目だち、とくに畿内古墳人骨との差異が著しい。また高さに関しては現代人骨より明らかに低いが、縄文、深堀弥生人骨などよりは高く、古墳人骨および土井ヶ浜、三津などの弥生人骨とやや近似した傾向がうかがわれる。

Martin	項 目	1号人骨(♂)	2号人骨(♂)
1	頭 最 大 長	184 ^{mm}	182 ^{mm}
8	頭 最 大 幅	137	(142)
17	Ba - B - 高	134	
8/1	頭 長 幅 示 数	74.46	(78.02)
17/1	頭 長 高 示 数	72.83	
17/8	頭 幅 高 示 数	97.81	
23	水 平 周(G)	515	(520)
24	横 孤 長	310	(305)
25	矢 状 孤 長	(360)	(356)
43	上 顔 幅	99	
45	頬 骨 弓 幅	136	
46	中 顔 幅	100	(102)
47	顔 高	126	118
48	上 顔 高	72	72
47/45	顔 示 数	92.65	
48/45	上 顔 示 数(K)	52.94	
48/46	上 顔 示 数(V)	72.00	(70.59)
51	眼 窩 幅	40(r)	
52	眼 窩 高	34(r)	
52/51	眼 窩 示 数	85.00	
54	鼻 幅	26	
55	鼻 長	54	48
54/55	鼻 示 数	48.15	
72	全 側 面 角	83°	82°

附表 頭蓋骨計測値

顔面部では頬骨弓幅が一三六^{mm}、中顔幅が一〇〇^{mm}、顔高が一二六^{mm}、上顔高が七二^{mm}で、顔示数は九二・六五、上顔示数(K)は五二・九四、上顔示数(V)は七二・〇〇となり、すなわち顔型としては *leptoprosop. mesen. chamaeprosop.* に属している。数値の上から比較諸群との関係をみると、一号人骨は頬骨弓幅、中顔幅など幅径では小さく、顔高、上顔高など高径では大きい値を示し、縄文人骨あるいは深掘弥生人骨のように寸つまりではなく、現代人的な細長い傾向が現われている。示数値でこれを見ると、縄文人骨、深掘弥生人骨あるいは古墳人骨よりも細長型で、土井ヶ浜、三津などの弥生人骨と近似しているが顔径、高径共

にかなり小さく、むしろ現代人骨と最も近い値を示している。

次いで眼窩部および鼻部の形状についても顔型と同じような傾向がみられ、眼窩示数は八五・〇〇、鼻示数は四八・一五で、それぞれ *hypsiconch*, *mesorhine* に属している。すなわち縄文人骨や深掘弥生人骨にみられるような扁平なものではなく、幅径に比して高径が比較的大きい値を示している。

また全側面角では八三度で比較的大きい角度を示している。

二号人骨 二号人骨は一号人骨よりも保存状態が悪く、とくに右側および底部の大部分が欠如しているため、計測には適当でなかった。したがって一側を計測して二倍したものがあるが、これらはいずれも表中および文中では()内に数値を記載した。

頭最大長は一八二^{mm}、頭最大幅は(一四二^{mm})で、長幅示数は(七八・〇二)となり、頭型としては *brachycephalic* に属している。比較諸群との関係を見ると、縄文人骨、深掘弥生人骨などより長、横径共に小さく、現代人骨よりはやや大きい。全体としては土井ヶ浜弥生人骨、西日本古墳人骨などと近似しているが、畿内古墳人骨よりは長頭の傾向が認められる。

顔面部では中顔幅が(一〇二^{mm})、上顔高が七二^{mm}、顔高が一八^{mm}で、上顔示数(V)は(七〇・五九)となり、(*chamaeprosop*) に属している。

比較諸群との関係は一号人骨におけるのと同じく縄文人骨や深掘弥生人骨などより細長く、土井ヶ浜、三津などの弥生人骨あるいは現代人骨に近い傾向がみられる。また全側面角は八二度であった。

二、下 顎 骨

下顎骨は全体に大きく、比較的大顎であった。骨体部ではオトガイの高さがかなり高く、一号人骨が三九^{mm}、二号人骨は三四^{mm}であった。オトガイ孔は中央よりやや下方に位置していたが、左右共に一個ずつで、第二小白歯の下方に認められた。

下顎枝は高さに比して幅が広く、下顎枝角は一号人骨一二三度、二号人骨一二〇度で、直立の傾向がみられるが、下顎切歯は比

較的深く、筋突起も頭丈なものではなかった。また咬筋附着粗面も余り粗糙ではなかった。

三、咬合型および歯牙

一号、二号人骨共に缺状咬合であった。歯牙は一号人骨においては、右上顎第三大白歯が欠如し、左上顎第二小白歯より第三大白歯までは観察できなかったが、その他は正常萌出していた。右上顎側切歯、左上顎中、側切歯、犬歯および左下顎第三大白歯は死後脱落したものである。

二号人骨では左上顎第三大白歯が埋伏智歯で、また両側下顎の第三大白歯は埋伏して水平近心智歯であったが、その他は正常萌出し、左下顎の中、側切歯は死後脱落したものである。

また咬耗度は一号人骨が Brook の二度、二号人骨が Brook の一度であった。

観察されたすべての歯について再歯は認められなかった。

四、四肢骨および軀幹骨

四肢骨および軀幹骨はいずれも破砕がひどく、接合復原することは不可能であった。また残存した人骨を二個体に識別することもできなかったが、四肢骨は全般に頭丈なものではなく、上腕骨の三角筋粗面なども著明でなかった。大腿骨は粗線の発達も弱く、柱状形成はなく、比較的円味を帯びたものであった。ただ脛骨では残存部から扁平性が多少強い傾向がうかがわれた。

また椎骨は椎体部が平滑なものが残っていたが、腰椎には椎体の変形が認められた。

三、総括および考按

大分県北海部郡佐賀関町神崎所在の猫塚古墳から出土した人骨資料は壮年男性二体であった。その頭蓋骨計測値は附表に表示し

たが、以上述べたことがらを要約すれば次の通りである。

一、猪塚古墳人骨の頭蓋骨は前頭部より頭面上半部にかけて鮮紅色の着色がみられたが、その色調より朱(紅)を成分とする顔料が使用されていた。

二、竪頭蓋は側頭縁、乳線突起などの発育は良好ではなかったが、前頭部は後方に傾斜し、外後頭隆起が突出していた。後頭部は後下方に突き出て、いわゆるサイ植頭的な傾向が現われていた。

三、計測値については長頭の傾向が強く現われ、とくに畿内古墳人骨との差異が著明であった。また高径およびその示数値に関しては、縄文人骨よりは高く、現代人骨よりは低い、弥生、古墳人骨とは近似した傾向がみられた。

四、顔面頭蓋に関しては、幅径が小さく、長径が大きく、これから算出される示数値については縄文人骨、深掘弥生人骨あるいは他地方の古墳人骨などよりは細長型を示し、土井ヶ浜、三津などの弥生人骨および現代人骨に近似していた。また眼窩示数および鼻指数についても同様の傾向が認められた。

五、下顎骨は全般的に比較的大きく、とくにオトガイ高が高く、下顎枝も聳立の傾向を示していたが、咬筋粗面は余り粗糙ではなかった。

六、咬合型は二体共に缺状咬合であったが、第三大臼歯は一例では左上顎において欠如し、他の例では左上顎で埋伏智歯、両側下顎では埋伏して水平近心智歯となっていた。また咬耗度は軽度で両歯は全くみられなかった。

七、四肢骨および竪頭骨では一部分が残存していた。四肢骨は上、下肢共に余り頭丈なものではなく、大腿骨の柱状形成もみられなかったが、脛骨では扁平性の傾向が認められた。

八、椎骨の体部は一般に平滑であったが、腰椎の残存したものに高令者を思わせるような変形がみられた。

九、猪塚古墳人骨の頭蓋骨は強い長頭性が現われていることが一つの特徴と思われるが、比較諸群の中で短頭性の強い畿内古墳人

骨と最も大きな差異を示していることは注目すべきである。鳥・寺門は近畿人の短頭の性質はおそらく古代から現在までいずれの時代にも著しく変化することなくもつていた地方的特長ではなからうか、と述べているが、¹²⁾少なくとも古墳時代日本人には、すでにかなり大きい地方差が存在していたことは考えられる。また全体を通じて、猫塚古墳人骨は西日本各地から集められた城の古墳時代人骨や、上記の鳥・寺門の畿内古墳人骨などよりも、土井ヶ浜、三津など山口、北九州地方の弥生人骨と近似した傾向がみられるが、最近行なわれた佐野の九州古墳人骨に関する学会報告でも同様の傾向が指摘されている。¹³⁾

次いで猫塚古墳人骨は縄文人骨および現代人骨との間にそれぞれ差異を示しているが、城の報告では古墳人と現代人との差は古墳人と石器人のそれとほとんど同程度であると述べ、¹⁴⁾また鳥・寺門は近畿古墳人と近代近畿人間の相異は近畿古墳人と縄文先史人とのそれよりも大きいと述べているが、猫塚古墳人骨のばあいには、縄文人骨よりは現代人骨にはるかに近い結果を示しているようである。

四、結 語

一、猫塚古墳人骨の脳頭蓋には強い長頭性が現われ、頭面頭蓋では幅径が小さく、高径が大きい値を示した。

二、比較諸群の中では、他地方の古墳人骨よりも山口、北九州地方の弥生人骨との間に近似した傾向がうかがわれた。

三、縄文人骨および現代人骨との間にはそれぞれ差異を示したが、猫塚古墳人骨と縄文人骨との差異は現代人骨のそれよりもはるかに大きいものであった。

文献および注釈

- (1) 小出富士雄「第壹石を出した大分縣通塚古墳」(昭和四十二年度西日本史学会春季大会考古学関係研究発表要録) 九州考古学、三十二・一九六七
- (2) 田辺義一「日本石器時代の未に就いて」人類学雑誌、五十八(十二)・一九四三
- (3) Martin Saller [Lehrbuch der Anthropologie] I Bd. 一九五八に拠って計劃した。
- (4) 清野謙次・宮本博人「澤養貝塚人人骨の人類学的研究、第二部頭蓋骨の研究」人類学雑誌、四十一(三、四附録)・一九二五
- (5) 金商勳次「吉野貝塚人人骨の人類学的研究、第一部頭蓋骨の研究」人類学雑誌、四十三(六附録)・一九二八
- (6) 金岡文夫他「山口縣豊浦郡豊北町土井ケ沢弥生式時代人頭骨について」人類学研究、七(附録)・一九六〇
- (7) 牛島陽一「佐賀県東青森村三津通跡出土弥生式時代人骨の人類学的研究」人類学研究、一(三、四)・一九五四
- (8) 内藤芳徳他「深瀬通跡Ⅵ人骨」人類学考古学研究报告、第一号・一九六七
- (9) 城一郎「古墳時代日本人骨の人類学考古学的研究」人類学雑誌、第一輯・一九三八
- (10) 島五郎他「近畿地方古墳時代人頭骨について(略報)」人類学雑誌、六十六(二)・一九五七
- (11) 原田忠昭「西南日本人頭骨の人類学的研究」人類学研究、一(一、二)・一九五四
- (12) 前出(9)
- (13) 佐野一「九州地方古墳時代人々骨の研究(予報)」日本人類学会日本民族学会連合大会第二〇回記事・一九六五
- (14) 前出(9)
- (15) 前出(12)

北海道郡佐賀関町周辺の調査

小 田 富 士 雄

佐賀関町における古墳の発掘調査を行なった機会に、坂ノ市から佐賀関にいたる沿線地域ゼネラル・サーベイを行なつて、古墳が成立した歴史的背景を追究すると共に、古代北海道郡の文化実態を把握したいと考えた。そこで筆者は調査の余暇をみては、聞きこみ調査と現地踏査を試みてある程度の成果をあげることができた。今回の調査以前に入江英親・岩尾松英岡氏によるこの地域の予備調査に負うところ多く、更に今回の調査に際しては農教委の橋本操六主事の機動力に負うところが大きかったことを記してまず感謝申し上げる。

北海道郡佐賀関町周辺は別府湾にのぞんで西から東に突出した半島を形成し、その東端にある佐賀関は豊予海峡をはさんで四国愛媛県佐田岬をのぞむ位置にある。この半島は平野に恵まれず、山がただちに海に迫っているのだ、交通路は海岸沿いに半島の沿辺をめぐるっているのが唯一の幹線陸路といつてよい。したがって古来農業に依存する生活はきわめて限られているが、瀬戸内型の温暖気候の影響をうけると共に地形を利用して漁業が発達した。「豊後風土記」海部郡の項に、「此郡百姓、並海辺白水郎也。因曰海部郡。」と郡名の由来を述べている。白水郎すなわち海人（あま、あまびと）と称された漁民の生活舞台であった。彼等は海中に沿つて鮑、海藻等を採り、白水郎（みずくぐり）といわれたのである。

海部郡が現在のように南北二郡になったのは、明治以降に大野郡の一部をさいて南海部郡としたものであつて、古代における海部郡は北海道郡一帯であつて、四郡に分たれていた。「豊後風土記」には丹生郷、佐厨郷、穂門郷がみえ一郷欠失しているが、

「和名抄」には

安萬郷、佐加、穗門、佐井、丹生

とあって佐加郷があらわれている。

丹生郷は本郡の西北丹生から東南臼杵にわたる広範な地域である。

佐加郷は旧大在村と坂ノ市町の一带で、現在の大分市坂ノ市町北半部があたる。

穂門郷は今の津久見市一带から南北二郡の境界にわたる地域である。

佐加郷は旧佐加郷に接し、南は丹生郷に接した地域で、旧佐賀関、一八屋、神崎を含み、今の佐賀関町一帯がこれにあたる。

今回調査を行なった地域は古代の佐加郷を中心とし、一部佐加郷に及んだのであった。

この地域についての考古学的な調査は、古く大正年代に梅原栄治博士によって手がけられた。梅原博士は坂ノ市から神崎にわたる地域の古墳の現状を踏査されてその報告をまとめて学界に提示された。^①これによってこの地方の主要な古墳の大要が知られるようになったのである。その後、下って昭和七年に神崎の築山古墳の内部主体が発掘され、佐藤虎雄氏の調査報告が発刊された。^②

以上の調査によって旧佐加郷、佐加郷方面の古墳はかなり知られるようになったが、その前後の時代の遺跡遺物については調査報告されておらないままに今日に至ったのである。したがって交通の便をはなれた地域もさることながら、考古学的には未調査地域としてのこされたのであった。そこで今回この地域の古墳調査がとりあげられたのを機に、周辺調査をあわせ行なってまず基礎資料の有無を確かめることをはかったのである。短時日であったから、決して十分な調査とはいえないけれどもまず第一回の基礎調査としての成果をあげることはできたと考える。これをもとにして将来さらに機をみて幾度か続行し、完全な記録作成をすべきことは勿論である。

今回の調査は、まず地図の上に見出し、踏査した遺跡を記入することからはじめたが、さらにそのうちのいくつかについては観察記録を作成することもできた。以下遺跡分布図と対照しながら整理しておく(第1図)。



第 1 圖 佐賀關附近諸點分布圖

1、黒島古墳（臼杵市黒島）

2、陶製指鉢出土地（北海道郡佐賀岡町一尺屋・上浦）……後出報告参照

3、中広銅矛出土地（北海道郡佐賀岡町幸ノ浦）……後出報告参照

4、三柱神社石棺（北海道郡佐賀岡町幸ノ浦）……後出報告参照

5、稲荷さま古墳（同右）横穴式石室古墳（円墳）が崩壊している。

6、辛幸古墳（北海道郡佐賀岡町幸幸）円墳

7、應安六年銘宝篋印塔（北海道郡佐賀岡町大志生木・十谷）……後出報告参照

8、坊主山古墳（北海道郡佐賀岡町木佐上）円墳²

9、中ノ原古墳（北海道郡佐賀岡町神崎・中ノ原）横穴式石室古墳（円墳）……本書報文参照

10、元金毘羅石棺（北海道郡佐賀岡町神崎）……後出報告参照

11、築山古墳（北海道郡佐賀岡町神崎・淨願寺）前方後円墳（石棺²）……本書報文参照

12、猪ノ谷古墳（北海道郡佐賀岡町神崎）円墳²

13、猪塚古墳（北海道郡佐賀岡町神崎）円墳？（石棺¹）……本書報文参照

14、千人塚古墳（北海道郡佐賀岡町馬場）円墳

15、馬場石棺（同右）

16、馬場古墳（同右）前方後円墳……本書報文参照

17、平形銅剣出土地（大分市坂ノ市町浜）銅剣4出土 日本考古学協会編「日本農耕文化の生成」

18、狹峰銅戈先出土地（大分市坂ノ市町久原）

19、広鋒銅矛、銅戈出土地（大分市坂ノ市町木田・名辺山）銅矛2、銅戈3出土

以上の遺跡地名録によっても、佐賀関周辺には古墳時代遺跡がかなりみられるが、すでに未調査のうちに盗掘され或は破壊された状態にあるものが多い。なかでも神崎附近に古代の前方後円墳を含む見るべきものがある。先史時代では坂ノ市附近に青銅器の発見がやや集中しているが、佐賀関町幸ノ浦で今回さらに中広銅矛の新発見があったのが注目された。歴史時代に下つては二、三の中世資料が発見されている。次に二、三のものをとりあげて報告しておく。

一、三柱神社石棺（図版第一六）

所在地・北海道佐賀関町幸ノ浦

豊予海峡をのぞむ遠見山東南中腹にある。一祠堂があり、傍に「三柱神社之塔」銘石碑が建立されている。祠堂の下から明治以前に一石棺が発掘され、棺内から三体の人骨が発見されたという。礎床で朱土が多かったと伝えられる。その後、大正末年頃に改葬してその上に祠堂を建てたのである。現在祠堂の中には棺内に敷かれていた礎を壁におさめ、古式土師器の破片若干がある。この土師器片が副葬品であるならば、石棺の年代は四―五世紀代まで下されるであろうが、土師器の所属について明確な出土状況を知ることができなかった。

二、元金毘羅の石棺（図版第一六）

所在地・北海道佐賀関町神崎

神崎部落の南にそびえる山の中腹に通称元金毘羅と称される整地された平地がある。ここに緑泥片岩の板石を参道状に敷いているが、これが組合箱式石棺の棺材である。この遺跡はすでに古く大正時代に梅原末治博士の調査があったので、その報文を引用す

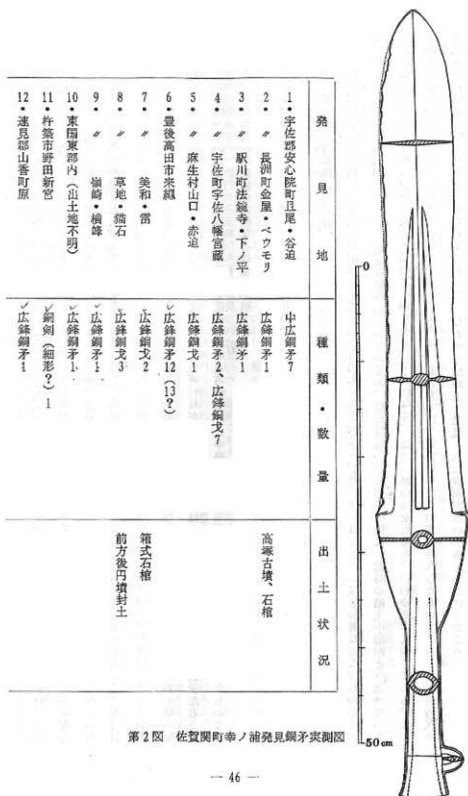
る。

(前略) こゝは墓だ眺望が佳いので、今から凡そ八年前(大正五年)上部を削平して招魂社を建設せんと地均し工事を行ふ際偶然棺を見出して古墳なのを知つたのであると云ふ。そして、発見の棺は東西に主軸を置き、其の内部には刀剣や鎗身の類が存したとの事である。現在では棺は破壊し終つて原形は見られないが、其の用材が後に建つた小祠への参道の敷石や石階等に用いられてあるから、一々の形を測つて木米の大きさを構造を想像し得る。発見の結果に依るに、棺は少くも三個はあつたらしく、用材は何れも俗に背石と云ふ緑泥片岩で側石と思はるものは長さ七八尺の間にあり、前後石は幅一尺六七寸内外が多い。そして前者には前後石を組み合はせる為に両端近くに切り欠きを加へたものや朱のなほ遺存するものなどがあつて、一個の如きは右の切り欠きから棺の内法の長さ五尺八寸であつたことさへ分明する。神崎村長が私に告げて、棺はもと三四個あつて各棺共に前後左右と蓋底の六石から成つていたと云つたのは蓋し事実を伝へたものと考へる。(中略) たゞし三四個の棺が一の封土内にあつたものであるか否か、また相互の位置關係如何などは全く不明である。^①

三、中 広 銅 矛 (図版第一七)

出土地・北海道佐賀岡町幸ノ浦

昭和九年、豊予海峡に面した遠見山の南麓で箱式石棺から出土したと伝えている。銅矛は片方にかなり顯著な刃こぼれがあるが完形品で、全長八三・三釐をはかる。全面緑蝨をかぶっているが、製作は良い。袋部の中には鑄造時の粘土中型がとり出せないままにのこっている。身幅は中ほど(七・二釐)も鋒部もさして変化なく、ほぼ一様の幅をたち、いわゆる中広銅矛である。袋部の片側に耳がついている。総じて矛の仕上げは入念である。北九州方面で製作されてこの地に移入したものであらう。弥生時代中期末から後期前半頃の時期に比定されるであらう。なお大分県地方で発見された青銅利器の一覧をかかておこう。^②



第2図 佐賀関町幸ノ浦発見銅矛実測図

13・ 〃 日出町真那井	〃 廣鋒劍矛7	弥生後期土器散布地 弥生式土器散布地 土壊 箱式石棺
14・ 日出町大津	〃 廣鋒銅戈2	
15・ 日田郡津江山	〃 中広銅矛2	
16・ 日田市石井・石井神社蔵	〃 中広銅矛1	
17・ 〃 大原神社蔵	〃 中広劍矛1	
18・ 玖珠郡玖珠町森・三島神社蔵	〃 中広銅矛2	
19・ 〃 玖珠町帆足神社蔵	〃 中広銅矛2	
20・ 大分郡大南町松岡・京尾	〃 中広銅矛5	
21・ 直入郡久住町鉢木	〃 廣鋒銅戈3	
22・ 大分市滝尾・岩屋	〃 廣鋒銅戈1	
23・ 〃 坂ノ市町浜	〃 平形銅劍4	弥生後期土器散布地 弥生式土器散布地 土壊 箱式石棺
24・ 〃 坂ノ市町久原	〃 廣鋒銅戈片1	
25・ 〃 坂ノ市町細	〃 廣鋒銅戈1	
26・ 〃 坂ノ市町木田・名辺山	〃 廣鋒銅矛2、廣鋒銅戈3	
27・ 〃 坂ノ市町丹生・岡	〃 革形銅劍1	
28・ 北海道佐賀関町幸ノ浦	〃 中広銅矛1	
29・ 臼杵市下北津留・坊主山	〃 廣鋒銅矛7	
30・ 〃 諏訪・中山	〃 廣鋒劍戈1	

この一覽表によつてみると、中広銅矛は日田郡、日田市で四口、玖珠郡で四口、その北に隣接する宇佐郡安心院町で七口あり、さらに大分郡で五口、そして今回発見の佐賀関の一口となる。この出土地をたどれば、筑前朝倉、筑後浮羽方面から日田郡、日田市に入り、玖珠郡、大分市を経て佐賀関に至る輸入ルートが考えられる。これに対して広鋒の銅矛、銅戈の類は宇佐郡、豊後高田市、東国東郡、逸見郡を経て直入郡、臼杵市方面への伝播が考えられる。すなわち豊前から周防灘、別府湾沿岸を経由して直入、海部方面への伝播ルートを考定できるのである。これに対する中広銅矛の伝は筑後川―大分川ルートに拠つたとみることができよう。

四、応安六年銘宝篋印塔（図版第一八）

所在地・北海郡佐賀関町大志生木・十谷

大志生木を奥深く入った字十谷の山中、海拔百一五十米のあたりで巨なお暗く樹木の生い茂ったなかに一基の凝灰岩製宝篋印塔がある。俗称西庚神と称されるところで、古く寺があったが大友宗麟が焼き払ったという伝承がある。古い石塔があるという聞きこみを得てかなり探しあぐねた末にやっと見つけることができた。応急のことで実測調査を行なう余裕もなかったので写真撮影と、紀年銘を判読するにとどまった。よく完存するものであるから得米実測をすすめる保存の策をたてるべきであろう。基礎、塔身、笠、相輪を完存しており、基礎には

応安六年 癸丑十月廿三日

の紀年銘がある。塔身には薬研彫りでアク（不変成就・北）・ウーン（阿闍・東）、タラーク（宝生・南）、キリーク（弥陀・西）の金剛界四仏種子が正しく刻まれている。笠は四隅の耳にカスブの一段加工がある。相輪は下から反花、請花、九輪、請花、火焰形宝珠の構成をとり、国東塔の要素が導入されている。花座は九輪の請花は重弁であるが、反花と宝珠の請花は單弁でこの時期の

特徴がよくあらわれている。特に注意をひいたのは宝珠の請花に墨書による重弁表現があり、九輪の溝の部分も黒で塗りつぶされている。墨書の保存はきわめて鮮明である。

なお、應安六年は西暦一三七三年、北朝の紀年である。本石塔は南北朝期の特徴を備えた好例として学術的価値は高い。

五、陶 製 摺 鉢 (図版第一九)

出土地・北海道佐賀岡町一尺屋・上浦

井戸を掘開していた際に地下深くから発見されたという。褐色硬質陶製で、摺鉢の古形である。一方に注口をもうけ、内面には九本歯の櫛による放射状に九ヶ所かき目が施されている。口縁は外側に折り返されて厚くつくられ、中世陶の特徴を備えている。備前系の古陶と思われる。この地方は豊予海峡を挟んで中国、四国に近いので、古来、瀬戸内方面との交流が行なわれ、中世には海賊の横行も盛んであったという。瀬戸内との文化交流を物語る一資料というべきであろう。完形で発掘されたこともこの種の資料としては珍しい。

六、王ノ瀬天満宮の家形石棺

所在地・大分市坂ノ市町王ノ瀬・天満宮

丹生川の川口に近い北岸近くの天満宮の小堂内に一個の凝灰岩製家形石棺がある。梅原末治博士がその概要を紹介されたことがあるが、^①未だ正確な実測図の作成されたことがないので今回調査の余力をもって調査することにした。

この石棺は明治初年に附近の道路改修に際して発見されたものを天満宮境内にはこんで保存するに至ったという。

石棺は蓋がいくつかに割れているが破片はほぼそろっている。長さ二・五三米、中央幅一・〇八米のやや胴ふくらみある長方形

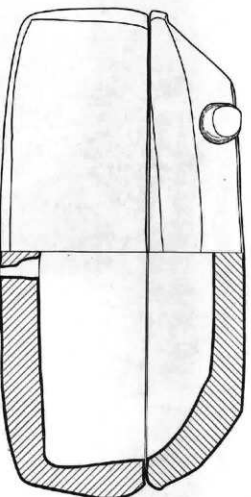
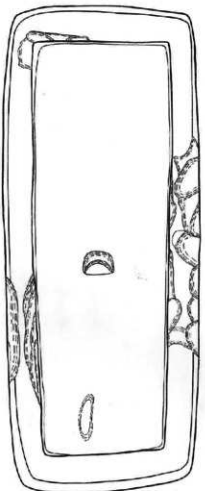
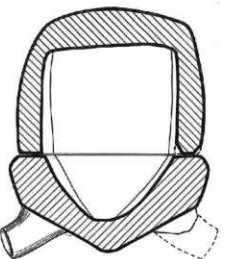
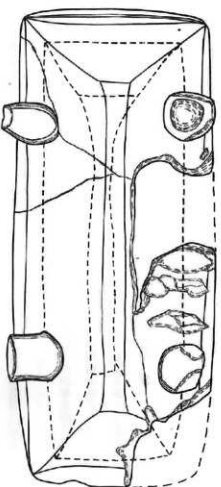
で、高さ五一匁、四注造屋蓋の形成をとる。屋頂幅十匁で幅せまく、竪堀突起は両斜面に各々二個ずつあり、側面観はかなり上方にむいている。冢形石棺としては古式の特徴を備えている。一石制抜き製作である。

棺身も一石制抜き造りで高さ七八匁、蓋とはほぼあわさるように胴張りもつくられ、底面もふくらませてある。棺床の中央部には穿孔があり、梅原博士は本来の水抜きかどうか疑わしいとされている。

註 ① 梅原末治『北海道に於ける三の古墳』（『歴史と地理』第十二卷三号）大正十二年

② 佐藤虎雄『築山古墳』昭和十年

③ 本表の作成には賀川光夫『新たに発見された東九州の銅鐸銅戈』（考古学雑誌三十九卷一號）昭和二十八年、大分県史料20（考古資料）昭和三十六年を参照し、その後の資料を添補した。



第3図 土ノ浦六輪造の象形(複製案)図

佐賀関周辺のゼネラル・サーベイ

入江 英 親

県教委の委嘱によって、別府大学文学部鶴尾岩尾松美氏と共に、去る昭和四十年三月、佐賀関町内をくまなく巡って遺跡の調査を行なった。調査とはいっても極めて短時日の間であり、別段試掘を行なったわけでもない中で、中には誤認もあらうかと思われる。しかし町公民館係長藤井武氏、一尺庵小学校教頭須崎正三氏等に終始行を共にしていただき、予期以上の成果を納め得たことはまことに感謝にたえない。

今回報告する古墳の発掘調査は、それらの中で特に緊急を要するもののみであった。しかしその他にもすでに石棺の露見しているものがあるなど、これらも早急に調査の要あるものと考えられる。それはともかく、自分等が足をはこんで実際に踏査した遺跡を表示すれば次表の通りである。なお遺跡名はそれぞれその地元での呼び名に従った。

名 称	所 在 地	所 有 者	備 考
荒 金 古 墳	馬場字猪ノ迫	荒 金 進	円墳
千人塚 古 墳	馬場字中原	原 清	円墳
小 野 古 墳	馬場字中原	小 野 園	円墳
庚申塚 古 墳	馬場字中原	原 清	前方後円墳
馬 場 古 墳	馬場字中原	小 野 辰巳	前方後円墳
猫 塚 古 墳	神崎字来ル島	稲 生 力	破壊されて現存せず 前所有者は久留島鬼熊

幸ノ浦古墳	稲荷塚古墳	幸幸古墳	坊主山古墳	浄願寺古墳	猪ノ谷古墳	湊古墳	河内仙人塚	築山古墳	前原古墳	鶴畑遺跡	高見古墳
関字幸ノ浦	関字幸ノ浦	志生木字幸幸	木佐上字宝蔵寺	神崎浄願寺	神崎字猪ノ谷	神崎字河内	神崎字河内	神崎字浄願寺	神崎字前原	神崎字鶴畑	神崎字鶴畑
絶外 五野一名秀太郎			渡辺實	八幡神社	荒金進	佐賀関町			木松丈夫	佐藤孟人	高見義治
現在には三柱様古墳と称している	円墳	円墳	円墳二基	円墳、文化二年の頃発掘	円墳二基	破壊されて現存せず	円墳	前方後円墳 史跡昭和一一・八・三国指定	円墳	土師	破壊されて現存せず

大分新産業都市計画区域内遺跡調査をかえりみて

岩 尾 松 美

昭和四十年九月二十二日より、担当区域の杵築市を始め各市町を約八十日間にあたり、遺跡の分布調査（所在地、種類、所有者、地目）を実施し新しい遺跡の発見に努めた。特に学問上重要であるものや、遺跡の保存等を目的に調査を行なった。

杵築市調査

杵築市においては大字横城方面に新しく前方後山墳一基と円墳、歴史時代のものと思われる製鉄所跡を発見。タタラ跡について文献等の関連調査をしたかったが、残念ながら日時都合でできなかった。横城より奈多方面には数カ所のタタラ跡があることも判明した。これは後日専門的な調査が必要である。横城字平河原池内より出土するサイフ型石器と、縄文早期と思われる石鏃や土器の出土層位の確認と、その周辺から出土する古墳時代、弥生時代、縄文中期、早期の土器、石器類については、その層位的確認の必要が考えられる。

鷹山川、八坂川周辺の古墳群、片野部落周辺と、照川附近の弥生、古墳時代の遺跡群等については、なんら保存、保護対策がとられておらず、その上宅地や柑橘園の開発により、形体を変え、未発見のものは、そのまま破壊され、消滅している。守江小学校台地の通称稲荷山の市道切取断面に露出している縄文早期の土器群においては、早急に調査の必要がある。（昭和四十二年度緊急調査実施）

佐賀関町調査

国指定築山古墳出土品の保管状況の確認、大字馬場字久留嶋から出土したといわれる板形石製品の出土地点の確認ができたこと（現物は別府市内某旅館所有とのことなるも不明）また江戸末期に部落民により発掘されたといわれる幸ノ浦古墳（通柱三柱様・

前方後円墳）出土の土人骨、鏡、銅鉾等の遺物について調査し、鏡は確認できなかったが、銅鉾は現所有者（小野忠彦）が判明した。その周辺の墓石のある円墳（盗掘）、旧陸軍火薬庫地内の石室墳（内部不明、封土流失）、また神崎より馬場部落には無数の古墳があるが盗掘により原形を残すのみであった。築山古墳周辺の山腹でも無数の石棺が発掘され、参道に使用した板石のみが残り、また封土の流出した古墳においては、所在の確認すらできなかったが、周辺に無数の遺構があると思われる。

湯布院町調査

盆地周辺の山腹には古墳が点在している。八山のごときは山全体に石積、横穴があり、いつの日にか発掘された遺物の所在の聞き込みをしたが、すべてが不明であった。弥生の遺物を藏している家があったが、採集者が故人となり、出土地の所在を知ることができなかった。また賀川教授の調査した古墳出土品の写真にあった鉄鉾は女学院の物置の中から発見され、町の職員に保管方を願ったこともある。

飛岳の縄文早期の遺跡も、団地開発などにより消滅することが考えられる。若杉部落の縄文早期遺跡は開田により破壊され、湯ノ平縄文早期の遺跡も水田開発により、破壊されている。

塚原部落の古墳群については、数基試掘を試みたが、古墳であるかは実の所疑問である。湯布院町内の遺跡も、観光ブームにより、段々と日のたつにつれ、消滅の一路をたどっている。

野津原町調査

大字辻原字大原、通称原に約一町歩にわたる弥生遺跡があったが、昭和三十年頃までに開拓され、桃園と柑橋園に変わり破壊されている。また町内には数十の古墳があるが原形をたつのみで盗掘されている。今市中学校校庭の地断面では、地表八十釐のところに縄文土器の出土を見たが、残余地には校舎が建築されていたため調査できなかった。非常に良質な焼成の土器を埋蔵する遺跡であるため破壊が惜しまれる。

庄内町調査

町内には点在して古墳、弥生時代、縄文早期の遺跡がある。柿ノ原字下田の道路端に、切石造りの板碑が一基ある。「應安元□」の刻銘があり、高さ二米余、幅巾四十センチ、厚さ三十センチ。その周辺に弥生遺跡がある。

また、町内には江戸時代のキリシタン墓も点在す。

内山部落の山頂の近くに、「天保十一年子一月」の刻銘入りの石段を祭る溜池がある。湯布院町湯ノ平部落田伏縄文遺跡と山をはさんだ地点である。この池の南側約五十米に広がり石器押裂土器を出土する。

大分市稲田地区

稲田地区内には多くの遺跡がある。国指定史跡函分寺跡の古瓦の集積埋藏地は旧境内の旱地であり、宅地造成などによる破壊が考えられる。千代丸古墳は石室内に兩もりがあり壁面の清滅が心配される。

丑殿古墳のある片而部落上の山中には古墳が点在しているが、封土のみ残し盗掘されている。台地上の茶園造成の時石棺数基が発掘され、人骨数体が出たらしいが、遺物等については不明である。

木ノ上部落より南に七瀬川に向いほぼ直角に近く舌状に形成された台地の中央部に、前方後円墳と円墳がある。前方後円墳（御陵古墳）は、江戸末期に発掘された石棺一基が後円部に露出している。その横に石碑があり御陵とある。葺石を有する境内にも数少ない古墳であるが、圃地造成により、破壊の恐れがあり、早急に保護すべきである。また、台地突端には石仏があり、その下壁に横穴古墳が数基ある。また、台地上の浅草神社には石棺一基が露出している。

大分川と七瀬川を二分する雄城台地に弥生遺跡と、台地に連なる山中に數十の古墳がある。片面部落側の崖面には小野鶴横穴古墳群がある。その一つは子持に構築され、玄室を四室持つ興味のある古墳であるが、入口が道路面のために破壊される恐れがあり、早急に記録保存する必要がある。稲田地区内の遺跡は、色々な開発により破壊されて消滅する地域であることを特記したい。

今日までの調査を振りかえって見ると、各市町村における埋蔵文化財の保護の立ち遅れと、今少し事前に注意して、県民一人一人が認識をもって、我々の祖先が残してくれた遺産を大事にする態度を養う必要性を痛感すると同時に、県内遺跡調査に対し、一市町村当たり少なくとも、二十五日程度の調査日数が必要であるとともに、常時文化財保護パトロールを実施する必要性があるので
はなからうか。

終りに調査に御協力賜わった関係市町村に対し深く感謝いたします。

あ　と　が　き

大分県文化財調査報告書も第十五輯を数えることになりましたが、文化財保護思想の普及啓蒙を徹底するためには、各分野にわたる報告書刊行の必要性を痛感いたしております。

また、全国の各位から寄贈方あるいは入手方の連絡をいただき、関係者として大いに喜びに堪えないところでありますが、印刷部数の関係でやむなくお断りいたしており、誠に残念に思っている次第であります。

今後は、各位の要望に答えるため、より多くの報告書を刊行いたしたい所存でございますので、格別のご協力をいただけますようお願いいたします。

最後になりましたが、大分県文化財調査報告書第十三輯の野間古墳群の報告（十三頁）の中に、「大分大学教授富米隆氏が調査」の記述がありました。本人からのご指摘により、かかる事実がなかったことが判明いたしましたので、ここに謹んで訂正いたしますとともに、心からお詫び申し上げます。

昭和四十三年三月

大分県教育庁社会教育課長

戸　田　成　一

中ノ原 馬場 古墳緊急発掘調査

大分県文化財調査報告 第十五輯

—昭和四十一年度新築部区域内緊急発掘調査—

昭和四十三年三月発行（非売品）

編集発行 大分県教育委員会

別府市中央町九番十五号

印刷所 日の丸印刷株式会社

